

3週間の教育実習を振り返ると、辛いこともあったが、それ以上に楽しく貴重な経験だった。そして、何より生徒がとても可愛かった。

私は高校2年生の文系クラスをHRで担当した。実習校では、学校全体(9割はオンライン)、学年ごと、そして各自のクラスの順に朝礼が行われ、HR担当クラスの朝礼(および終礼)は実習開始2日目から任されることになった。初めは緊張して、生徒への言葉の伝え方が難しかったが、次第に慣れ、生徒も話を集中して聞いてくれるようになった。もちろんまだまだ未熟ではあるが、たくさんの数をこなさせていただいたことに感謝している。そして、生徒との関わり方についてHR担当の指導教員からさまざまなご指導をいただいた。(※私の実習校では、指導教員がHR担当および教科担当の二人いた。)以下に、生徒との関わり方や、生徒への言葉の伝え方など、実習中にご指導いただいた点を述べる。

まず、呼吸や間のおき方を工夫することが重要である。これだけで、生徒の反応が変わった。一拍だけでも呼吸や間を置くことで、手を動かして話を聞いていなかった生徒の注意を引くことができた。また、目線にも注意を払う必要がある。最初は連絡事項を確認するために、目線がパソコンへ行きがちであった。しかし、教室の角を見て、奥から教室を見渡すように話すことで、生徒は自分に話していると感じ、話を聞いてくれるようになった。目線に関しては、慣れるまで時間がかかったので、常に意識した。

また、挨拶直後に連絡事項を伝えるのではなく、一度指示を出すことも重要である。「全員手を止めて一回話を聞こう」や「〇〇は聞いておいて」など、連絡事項の内容に合わせて、誰に聞いてほしいのか伝えることが効果的である。そして、連絡事項は噛み砕いて自分の言葉で伝えることが大切である。自分の言葉で伝えることで、生徒にもわかりやすく響くはずだ。その際に、自分の情報も交えて話すと、生徒から関わりやすくなり、距離も縮まる。そのため、連絡事項の後には毎日生徒に一言メッセージを伝えた。これらから、自己開示や自分のテンション感を出すことも大切であると学んだ。しかし、これらの限度を過ぎてしまうと生徒に軽んじられる可能性があったり、教師のテンションにより生徒のテンションも左右されたり、起伏の激しい教師と思われるかもしれない。そのため、どちらもバランスが大切であると学んだ。

さらに、連絡事項の取舍選択はその内容やクラスの雰囲気を見て決める必要がある。全体に伝える必要のない連絡の場合は、個人で伝える。これにより、生徒は「私のことを気にかけてくれている」と感じる。また、生徒に伝えたい大切なことは朝礼だけでなく終礼でも伝えるなど、連絡事項の取舍選択は難しいと感じた。これらを通して、HRクラスの朝終礼では人の前に立つときに役立つ力を養うことができた。

私が実習中に印象に残っている言葉がある。それは、HR担当の指導教員が実習簿に書いてくださった「生徒は自分をうつす鏡」、「生徒まみれになってくださいね」という言葉2つだ。実習を通して、指導教員の言っている通りだと思った。なぜなら、これらを伝えられたときから、積極的に生徒に話しかけたり、お昼ご飯と一緒に食べたり、自分から生徒と関わりを持つようにした結果、生徒から話しかけてくれるようになったからだ。自分の行動によって生徒を動かすことができたのは嬉しい体験であった。そして、私のことを慕ってくれたことが何より幸せだった。

次に、授業に関して述べる。授業では高校2年生の理系クラス(2クラス)では数学Ⅱ、文系クラス(2クラス)

では数学 B を教えた。理系クラスには、週に 4 コマ、文系クラスには週に 2 コマの授業を行なった。1 週目は授業見学で、2、3 週目に実際に授業を行なったので、合計 24 コマの授業を実施させていただいた。私の教科担当の指導教員は「個別最適化」の授業を行なっていたが、私はグループ学習を採用した。これは、教え合いの大切さを学生時代に私自身が経験し、生徒たちにも同じように感じてほしかったからである。自分が根本から理解し、論理的に考えることができれば人に教えることは難しい。そのため、人に教えることで論理的思考力が養われる。また、人に考えを伝えることは語彙力の向上も期待できる。さらに、数学の話を持定の人だけでなく、クラス内の誰とも話せるようになり、わからないときには放置せず、意思表示ができるようになってほしいという思いから、グループ学習を行なった。

私の授業では、冒頭で学習内容の説明を行い、その後はグループで演習時間を取り、最後の 5 分はリフレクションの時間とした。指導教員から、「生徒の活動時間とリフレクションの時間は確保してほしい」という要望があったので、説明時間は長くて 15 分とし、通常は 5 分程度とした。また、リフレクションは Google form から提出なので、授業後でも可能だが、極力授業中に出すよう声かけを行なった。授業の進行は、基本的に iPad の Good note (または ppt) を用いて、必要があれば板書をした。理系クラスは学習進捗の差があり、数学Ⅱの内容を一通り学習している生徒や、チャートを解き進めている生徒などさまざまであった。一方で、文系クラスは理系クラスと比べると、問題に対して真摯に向き合い、課題を進めている生徒が大半であった。理系クラスでは、寝ている生徒が少なからずいたので注意した。その際に、グループ内の生徒をつかって「隣の子起こしたって」や「周りのみんな頑張ってるで。起きようや」などの声かけを行なった。また、パソコンを全員所持している学校であったため、授業中と関係のないことをしている生徒もいた。その生徒には一度話に乗った上で、注意をした。そして、グループ間の交流で明らかにおしゃべりしにきた生徒に対しては、「教えに来てくれたん？」などの声かけをおこなった。全てに共通して、マイナスな発言ではなく、プラスの発言で注意するよう心がけた。これは、指導教員からの助言である。

研究授業では、「群数列」の授業を実施した。数学科の先生や実習生など 10 名以上に見ていただき、さまざまな意見をいただいた。研究授業に来ていただいた先生方全員に共通していただいた意見は、「生徒との対話を増やす」ことであった。生徒に考える時間を与えてはいたものの、答えを全てこちら側から提示してしまっていた。そのため、教師だけでなく生徒にも答えてもらうことで、集中力も上がり、授業への参加意欲も増すことがわかった。これは、事前指導で知っていたものの、実際に授業進行する際には行うことができなかった。緊張していたことや、生徒の活動の時間を確保しないといけない気持ちの焦りからだと考える。したがって、生徒主体の授業とするために、将来教師になったときには気をつけたいと思う。

最後に、教育実習中には辛いことがたくさんあった。実習期間中に家族に不幸があったり、ご指導をいただいたことで、自分の未熟さを痛感したり、正直やめてしまいたいと思ったときもあった。しかし、生徒からたくさんの元気をもらった。辛くても生徒と関わることで、自然と笑顔になることができた。もちろん、授業中に寝ていたり、パソコンで囲碁をしたり、注意しなければいけない生徒もいた。しかし、彼らも私の言葉を無視したり、授業を放棄したりするのではなく、話を聞いてくれた。そのため、生徒は総じて可愛かった印象である。3週間だけだったので、生徒の良い面しか見ることができていない可能性は十分にある。しかし、生徒のおかげで3週間乗り切ることができたのは確かである。そのため、生徒には感謝している。私は大学院に進学するため、教師の道は考えていなかった。しかし、教育実習を通して、100 名以上の生徒と関わり、改めて教師という職業に憧れを持った。忙しくも充実した最高の教育実習であった。